

『都のつと』と王朝古典文学 ——中世紀行文学に見る『源氏物語』の影響——

島内景二

1 はじめに

『都のつと』は、南北朝時代の歌人・宗久の書き記した紀行文である。これまで本格的な注釈がなく、研究論文もほとんど存在しなかった。ところが、平成二年十月に、『新・日本古典文学大系』シリーズの一冊として岩波書店から『中世日記紀行集』が刊行され、『都のつと』もその中に加えられた。福田秀一氏の詳細な注釈によって、初めてこの作品の全体像が明確になったのである。

本稿は、この『新・日本古典文学大系』（以下、『新大系』という略称を用いることにする）の校訂本文と注釈に導かれながら、『都のつと』の具体的な表現がどのような王朝文学の規制の下で成立したかを見定めようとするものである。『新大系』の注釈はかなり詳しいものだが、それでも巻末に補注を設けないという編集方針があるようであり、注釈すべくしてスペースの関係で盛り切れなかった内容が多々存在する。省略された最たるものが、『都のつと』が依拠した王朝文学との関係であろう。本稿は、それを可能な限り逐一指摘しようと思う。

このような研究の試みは、既に稲田利徳氏による「二条良基の『小島の口ずさみ』と『源氏物語』」（『国文学攷』平成元年六月）においてなされている。稲田氏は、『源氏物語』と中世紀行文学との表現の類似を指摘するだけではなく、そのような引用の背後に存在する主題を明確化しようとした。首肯できる見解である。本稿でも、単なる表現の類似の指摘に終わることなく、表現を発生させた作者の意図を少しでも抽出したいと考えている。

2 序・旅立ち

2・1 世捨人 『都のつと』の冒頭の文章は、「観応の比、一人の世捨人あり」というものである。ここには、『伊勢物語』の濃厚な影響がある。即ち、「京にありわびて」（七段）、「京や住み憂かりけむ」（八段）、「その男、身を要なきものと思ひなして」（九段）などと描写されている昔男の旅立ちが重ねられているのである。『都のつと』は、このように『伊勢物語』の影響下に最初の一文が書き記される。けれども、昔男は二条の后との愛に敗れて都を去って東下りしたのだが、その『伊勢物語』の肝心な点は『都のつと』には影響を与えない。仏道修行に志す真摯な人間の旅として、『都のつと』は開始するのである。以下、『都のつと』は、

いづくもつひの住みかならねばと思ひなしつゝ、しらぬひ筑紫を立ち出でしよりこゝかしこまよひありき侍りし程に、いさゝか知る便りありしかば、大江山の雲に臥し、生野の原の露に宿りして、さすらひ侍りし程に、丹波の国いや山といふ所に行きぬ。身を隠すべき宿とまでは頼まねど、其の年をばそこにて過ぐし侍りて、又の年三月ばかりに京へ上りて、二三日侍りし程に、清水北野の宮などへ詣でつゝ、それより東の方へ、修行に思ひ立ち侍りき。

と続いてゆく。「いづくもつひの住みかならねば」という表現は、直接には『新大系』の言うように「とどまらむとどまらじとも思はえずいづくもつひの住みかならねば」（『詞花集』を引歌している）であろう。しかし、前述したような「京にありわびて」「住むべき方」を喪失した『伊勢物語』の昔男の造型とも関連するのである。「こゝかしこまよひありき侍りし程に」

も、当然、「道知れる人もなくて、まどひいきけり」(九段)や、「むかし、男、武蔵の国までまどひいきけり」(二〇段)などを踏まえたものであろう。「いさゝか知る便りありしかば」は、『伊勢物語』一段の「むかし、男初冠して、奈良の京春日の里に知るよしして、狩にいにけり」をかすめたものである。「身を隠すべき宿」は明確な『伊勢物語』享受であり、五九段の「住みわびぬ今はかぎり」と山里に身を隠すべき宿求めてむ」を引歌している。「又の年三月ばかりにも、昔男と二条の后との愛をかすめているのさう。二人の愛は、時は三月のついたち」(二段)などに展開し、別離を余儀なくされた男は「又の年の正月に」(四段)去年を偲んで歌を詠んだのだった。

このように、『都のつと』の序の部分は、本質的に『伊勢物語』の影響下に発生している。けれども、このような『伊勢物語』享受は次第に減少してゆき、いつのまにか『源氏物語』の影響の方が顕著になってゆくのである。その傾向は、この序の部分にもわずかながら内在している。「いさゝか知る便りありしかば」は、『伊勢物語』一段をかすめていると言ったばかりであるが、実はもう一つここには『源氏物語』がかすめられているのである。「都のつと」の作者は「しらぬひ筑紫」を出発して都に到着したのだが、それと全く同じ空間移動をした人物が『源氏物語』の中に一人いる。玉鬘である。玉鬘は、筑紫を脱出して上京してきたのだが、居場所をなかなか発見できなかった。かろうじて、「九条に、昔知れりける人の残りたりけるをとぶらひ出でて、その宿りを占めおきて」(三巻・九六頁)という状況なのだった(巻数と頁数は、小学館・日本古典文学全集による)。そして、彼女は、岩清水八幡や長谷寺に参詣したのであるが、それは『都のつと』の作者が「清水北野の宮」などに参詣した事実と対応している。つまり、『都のつと』の表現は『伊勢物語』と『源氏物語』を二重の下書きとしているのである。そして、徐々に『源氏物語』の影響が『伊勢物語』の影響を上回ってゆくことになる。

管見に入った唯一の『都のつと』に関する既発表論文である中田武司氏の『伊勢物語享受と『都のつと』』(『学苑』昭和四十六年八月、以下「中田論

文」と略称する)は、『都のつと』の成立が『伊勢物語』によって大きな影響を受けた事実を強調する。それは、基本的に肯定できる見解である。しかしながら、中田論文は「歌枕」という観点から主として考察されており、具体的な個々の表現に関してはそれほど厳密には追究されてはいないように思われる。「歌枕」という観点を離れて、「表現」に関して王朝文学との関係を追究してゆけば、どうしても『源氏物語』の影響を無視しえないのである。そして、それは『伊勢物語』の与えた影響を上回るものがあるのだ。

2・2 旅立ち 宗久が京を出て東をめざしたのは、まだ暗い時分のことだった。

まだ夜を込めて都を出づ。有明の月の影、東川の浪に映りて、鳴き渡る鳥の声、遠里の跡に聞こえて、そこはかとなく霞み渡れる空のけしき、いとおもしろし。

この部分は、『源氏物語』須磨の巻の表現をそのまま引用している。光源氏が左大臣に別れを告げて退出したのは、

明けぬれば、夜深う出でたまふに、有明の月いとをかし。花の木どもやうやう盛り過ぎて、わづかなる木陰のいと白き庭に、薄く霧りわた

りたる、秋の夜のあはれに多くたちまさされり。(二巻・一五九頁)

という状況であり、見送る大宮も「いと夜深う出でさせたまふなるも、さまたりたる心地のみしはべるかな」(二六〇頁)と思ったという。『都のつと』は、旅立ちの理由を以前は『伊勢物語』昔男の東下りに対応させていたのだが、ここでは『源氏物語』光源氏の須磨への旅立ちと対応させているのである。けれども、光源氏の旅立ちの最大の理由としての藤壺との密通や、朧月夜との過ちなどの女性関係の失敗については、皆目引用されていない。『都のつと』は、

やがて逢坂山を越ゆ。杉の下道いまだ木暗く、関の岩角踏み鳴らすもたどとしき程、都のいつしかと距たり行くも、三千里の外の心地し

で、故郷を別れしよりも、猶心とまり侍りしにや。

と続く。「杉の下道」は歌枕であるから、特定の表現の影響は指摘できない

かもしれないが、『源氏物語』関屋巻の、
関山にみな下りゐて、ここかしこの杉の下に車どもかきおろし、木隠
れにゐかしこまりて過ぐしたてまつる。(二巻・三五〇頁)

あたりを、かすかながらかすめているのかもしれない。『都のつと』は本質的に『源氏物語』の影響下に成立したものと想定されるので、小さな関係でも指摘しておきたいのである。「三千里の外心地して」の部分は、どうだろうか。『新大系』は、紀在昌の「三千里外随行李、十九年間任転蓬」を引用していると注する。けれども、より直接には『源氏物語』須磨巻の、
うちかへりみたまへるに、来し方の山は震遙かにて、まことに三千里
の外心地するに、權の雫もたへがたし。(二巻・一七九頁)

を引用しているのではあるまいか。ちなみに、『源氏物語』の注釈書は、白氏文集の「三千里ノ外遠行ノ人」云々を本説として指摘している。『都のつと』の作者が依拠した漢詩文が何であれ、それを直接意識化したのは『源氏物語』の文章を契機としていることは確かであろう。作者は、都を離れる光源氏に自分自身を擬しているのである。

3 東海道の旅

3・1 さやの中山 先ほどは歌枕に限定しないで『都のつと』を読んでゆきたいと述べたのだが、やはり紀行文学は、歌枕を訪れることを一つの眼目としている。『都のつと』の作者は仏道修行に心を注いでいるわけだが、観念・理念としての歌枕を、実際に自分の目で確認するという作業に没頭することになる。西行法師の歌で有名な「さやの中山」が近づいてきた。

……佐夜の中山にもなりぬ。かの西行が「また越ゆべしと思ひきや」と詠めるも、あはれに思ひ合はせらる。佐夜の中山、さよの中山といふ、説々あるにや。中納言師仲、当国の任にて下られるに、土民「さよの中山」と申し侍りけるとて、中古の先達などもさやうに詠まれて侍るにや。撰集の中にも見及ぶ心地し侍りし。源三位頼政は長山とぞ申しける。此の度老翁のありしに尋ね侍りしかば、異様もなく、「さや

の中山」と答へ侍りき。

歌枕「中山」が「さやの中山」なのか「さよの中山」なのか、古来諸説があったが、現地の人々は、「さやの中山」と呼び慣らわしているという事実を報告して、長年の疑問に終止符を打ったのである。ここで「源三位頼政」が出てくるのは、なぜなのか。『新大系』は、「未詳。頼政集には『積りける雪ばかりかは木の間より月もしぐるるさやの中山』(右大臣家会・月照山雪)の一首があるが、如何」と注している。けれども、ここではまず何よりも古今注こそが参看されるべきではあるまいか。「土民」の発音によつて、古今集の難解な表現を決定しようとするのは、古今集注釈書によくある内容だからである。古今集・巻二・恋二・五九四に、

東路のさやの中山なかなか何しか人を思ひそめけむ
という歌がある。この歌に対する注釈を、以下に示してみよう。

故前源中納言師仲卿は下野へ下向せし人にて東路のことあまた聞きたる中に、此の山をば「さよの中山」といふなりとて歌にその心をよめり。(中略)又故頼政卿入道も、さやの長山といふと申しき。かれも父仲正下総介にて相具下向也。(『頼昭注』)

同様の内容は、『頼註密勘』『榮雅抄』などにも発見することが可能である。また、古今集・巻二〇・東歌・一〇九七にも、

かひがねをさやにも見しかけられなく横ほりふせるさやの中山
という歌があり、『頼昭注』などは頼政説を紹介している。けれども、ここには「師仲」は登場しないことから、『都のつと』の作者は古今集・五九四番歌に関する注釈の歴史を念頭に置いていると想定されるのである。その古今注が具体的に何であるかは、今のところはまだ断定することはできない。

3・2 宇津の山 ここでは、どうしても『伊勢物語』の影響が顕著にな

やがて駿河の国、宇津の山を越ゆ。薦の下道もいまだ若葉の程にて、
紅葉の秋思ひやられ侍り。

紅葉せば夢とやならん宇津の山うつゝに見つるつたの青葉も(中

略) 立たぬ日もありと聞きし田子の浦波にも、旅の衣手はいつとなく潮垂れがちなり。富士の山を見渡せば、いと深く霞込めて、時知らぬ山とも更に見えず。

この部分に影響を与えた『伊勢物語』の文章は有名であるから、引用する必要はないだろう。傍線部分の大半が、『伊勢物語』を踏まえている箇所である。けれども、この中にも微妙ながら『源氏物語』の影響が発見できる。まず、「若葉」という言葉。光源氏が紫の上を垣間見たときに詠んだ、

はつ草の若葉のうへを見つるより旅寝の袖もつゆぞかわかぬ(若紫 巻・一卷・二九〇頁)

という歌があるが、『都のつと』の「若葉」と「旅の衣手はいつとなく潮垂れがちなり」と表現的に類似しているのである。あくまで、言葉の問題なのだが。「立たぬ日もありと聞きし田子の浦波」は、古今集の「駿河なる田子の浦波立たぬ日はあれども君を恋ひぬ日はなし」を引用しているのだが、この歌は『源氏物語』で近江の君が下手な歌に詠み込んでおり、『源氏物語』の読者であるならば決して忘れることのできない地名の一つであろう。『都のつと』の「旅の衣手はいつとなく潮垂れがちなり」の部分は、先ほどは若紫巻を指摘したが、明石巻で明石の君が詠んだ、

寄る波にたちかきかねたる旅ごろもしほどけしとや人のいとはむ(二二 巻・二五八頁)

とも似ている。また、「潮垂る」という語は、『源氏物語』に何度も出てくるが、「潮垂れがちなり」という形容動詞は、桐壺巻の、

(桐壺帝は) 御しほたれがちにのみおはします。(二巻・一〇七頁)

くらいしかないので、言葉としては桐壺巻享受と言えるのかもしれない。つまり、この部分は圧倒的な『伊勢物語』享受なのだが、言葉のレベルでは『源氏物語』の影響が散見しているのである。それが、次の文章につながつてゆく。

(富士山は) 朝日の影に高嶺の雪なほあざやかに見えて、鏡をかけたるやう也。筆も及びがたし。

「筆も及びがた」い情景を描写しようとして、『都のつと』の作者は『源

氏物語』の表現を借りてくるのである。すなわち、浮舟の巻。

雪の降り積もれるに、かのわが住む方を見やりたまへれば、霞のたえだえに梢ばかり見ゆ。山は鏡をかけたるやうにきらきらと夕日に輝きたるに、昨夜分け来し道のわりなきなど、あはれ多うそへて語りたまふ。(六巻・一四五頁)。

また、総角巻には、

風のいとはげしければ、都おろさせたまふに、四方の山の鏡と見ゆる汀の水、月影にいとおもしろし。(五巻・三三三頁)

という類似表現も存在する。『都のつと』には、宇治十帖の表現の影響が発見できる。それが、もう少し後になると構想や主題の影響にまで高められてゆくことになる。

箱根権現の箇所では、「所の様」とか「いつとなく波風荒れて、いとすさまじく見ゆ」などと、光源氏の須磨流離がかすめられている。

4 関東各地を歴訪

4・1 知人の死 相模の国鎌倉を尋ねた作者は、「いにしへゆかりありし人」が早くに死去していた(「昔語になりぬ」)事実を知らされる。そして、

見し人の昔の下なる跡問へば空行く月もなほ霞むなり

という歌を詠んだ。「見し人」という言葉は、『源氏物語』で何回か歌に詠まれている。

見し人の雨となりにし雲居さへいと時雨にかきくらす頃(菱巻)

見し人の影すみはてぬ池水にひとり宿守る秋の夜の月(夕霧巻)

見し人の形代ならば身に添へて恋しきときのなでものにせむ(東屋巻)

見し人の煙を雲とながむれば夕の空もむつまじきかな(夕顔巻)

見し人は影もとまらぬ水の上に落ち添ふ涙いとせきあへず(手習巻)

見し人もなき山里の岩垣に心長くも這へる葛かな(総角巻)

見し人も宿も煙になりにしをなでてわが身の消え残りけむ(橋姫巻)

普通「見し人」は、男からみて妻(ないし愛人・恋人)を指すことが多いのだが、夕霧巻の用例だけは夕霧(男性)から見た柏木(男性)を指して

いる。「都のつと」も、それと近い。だからと言って『源氏物語』享受だとは断定できないのだが、物語的雰囲気や濃厚に留める表現であるとは言えるのではないか。また、「空行く月」の部分に関しては、次のような用例がある。

忘るなよほどは雲居になりぬとも空行く月のめぐりあふまで（『伊勢物語』）

おくれじと空行く月を慕ふかな遂に住むべきこの世ならねば（『源氏物語』総角巻）

めぐりあはむかぎりだになき別れかな空行く月のはてを知らねば（『狭衣物語』）

第一、旧知の人物を訪ねた時に彼がすでに死去していたという事実自体が物語的である。ここではさほどの主題的な盛り上がりは見せなかったけれども、このあとで同じような内容が非常に主題的に表現されることになる。

4・2 『伊勢物語』 享受 常陸の国で、作者は盗賊に襲われる。最初に「武蔵野」という地名（歌枕）を出したあとで、描写はつぎのように展開する。

此野は昔も盗人ありてこそ、「今日はな焼きそ」とも詠まれけると聞きおきしかど、さまでやとは思ひしに、苔の衣をさへ引きて帰りし白波の荒かりし名残に、いとど旅の床ももの憂くこそ待りしか。

「今日はな焼きそ」は、もちろん『伊勢物語』一二段を引用している。そこで「この野は盗人あなり」とあった事実を紹介したあとで、その連想から同じ『伊勢物語』二三段の「風吹けばおきつ白波立田山夜半にやひとり君が越ゆらん」が作者に意識され、自然と「白波の荒かりし」の文章が紡ぎ出されてきたのである。「白波」に盗賊の意味があるかは、否定説もあつて定かではないのだが、中世においては「白浪緑林」の故事（盗賊）が注釈書では常に指摘されていた。「都のつと」の作者の意識の流れが、手に取るように判明するくだりである。

ちなみに、「旅の床ももの憂く」云々は、『源氏物語』須磨巻の、

いともものむつかしう、この住まひたへがたく思しなりぬ。（二巻・二頁）

あたりをかすめているのかもしれない。

4・3 ひげ僧 作者は、秩父で一人の僧と出合った。

秩父山といふ所に年久しく住みて、仮にも里などへも出でぬ聖ありけるを、村の人ひげ僧など名づけたるとかや、いづれの所のいかなる人ともさらに知られず。

「仮にも里などへも出でぬ聖」の姿は、『源氏物語』でも何人が描かれている。光源氏を治療した北山の聖などもその一人である。しかし、「ひげ僧」との連想から、私は宇治十帖の八の宮の存在を思い浮かべる。八の宮と、彼の師である「聖だちたる阿闍梨」の描写を、少し引用してみる。

をさをさ公事にも出で仕へず籠りゐるに、（以下略）

俗聖とか、この若き人々のつけたなる、あはれるることなり。（以下略）俗ながら聖になりたまふ心の掟やいかに。（以下略）

聖の方をば卑下して聞こえなしたまへれば、なほ世に恨み残りける、といとほしく御覧す。

「ひげ僧」は、実際に鬚を生やしていたのだろう。また、この仇名は秩父の人間がつけたものだから、彼らが『源氏物語』を意識しているとは到底考えられない。けれども、それを耳にした作者は、『源氏物語』総角巻の「卑下」云々との一致に興味を持ったのかもしれない。このあたり、少しずつ『源氏物語』宇治十帖との関連が深まってきている。

4・4 上野の国での交流 作者は、上野の国で思わざる知遇を得た。その住まいのありさまは、つぎのように描写されている。

三月の初めの程なりしに、軒端の梅やうやう散り過ぎたる木の間に霞める月の影も雅びやかなる心地して、所の様も、松の柱、竹編める垣し渡して、お中びたる、さる方に住みなしたるも由ありて見えしに、家主出であひて、心ある様にたびの愁へをとびらひつつ、……

この箇所は、文句なく『源氏物語』を引用している。

住まひたまへるさま、言はむ方なく唐めいたり。所のさま絵にかきた

(1991年6月)

五卷

『源氏物語』の表現を圧縮して、再構成することで、『都のつと』の表現が成立している。『源氏物語』では連続していない部分が、『都のつと』では文章の中で連続して並んでいるのである。

ちなみに、「散り過ぎたる」という言葉も『源氏物語』でおなじみの表現であるし、「心ある様」は「音に聞く松が浦島今日ぞ見るむべも心ある蟹は住みけり」をかすめているのだろう（この歌は、『都のつと』のあとの部分でもっと主題的に立ち現れることになる）。

さきほど、『都のつと』と宇治十帖との水面下での関連を指摘してきたが、「竹編める垣」に関しては、類似する表現が橋姫巻にある。八の宮の住居が、

竹の透垣しこめて、（五卷・一二二頁）

とされているのだ。文脈的には、須磨巻の引用であることは明確だが、かすかながら宇治十帖の世界が揺曳している。それが、『都のつと』の次の部分につながってゆく。

「われも常なき世の有様を思ひ知らぬにはあらねども、背かれぬ身の絆のみ多くてかかづらひ侍る程に、あらましのみにて今日まで過ぐし侍りつるに、今夜の物語になむ、捨てかねける心の怠りも今更驚かれ」など言ひて、……

『都のつと』の表現が『源氏物語』と完全に一致するのではない。しかし、大君と中の君の二人の娘を「絆」として認識し、その行末の心配から完全に出家できないでいる八の宮の苦悩が、『都のつと』のこの表現と構想上（場面構成上）酷似しているのである。『都のつと』は、虚構の文学ではない。けれども、作者が直接体験した事実を文章として定着させるに際して、自分自身を求道者としての薫に喩え、自分の出合った人物を八の宮

に喩える「誇張」がなされたのである。住まいの描写は須磨巻から借用し、人間関係は宇治十帖から借用している。より大切なのが後者の方であることは、自明であろう。

5 再会を約した友の急死を悼む

薫と八の宮との関係にも似た作者達の友情は、悲劇的な結末を迎えた。

その秋八月ばかりに、かの行方もおぼつかなくて、わざと立ち寄りて訪ひ侍りしかば、その人は亡くなりて、今日七日の法事行ふ由答へしに、あへなさも言ふ限りなき心地して、などか今少し急ぎて訪ねざりけん、さしもねんごろに頼めしに、偽りのある世ながらも、いかに空頼めと思はれけん、心憂くぞ侍りし。

宇治十帖の八の宮の臨終は、「八月二十日のほどなりけり」（椎本巻・五卷・一八〇頁）とされている。『都のつと』では、八月ばかりに訪ねた時に友人の「七日の法事」がなされたのだから、やはり八月の死が描かれていると考えるべきだろう。八の宮を失った薫の心中は、

いとあへなく口惜しく、いま一たび心のどかにて聞こゆべかりけると多う残りたる心地して、おほかた世のありさま思ひつづけられて、いみじう泣いたまふ。（五卷・一八二頁）

などか、さしもやはとうち頼みて、また見たてまつらずなりにけむ、秋やはかはれる、あまたの日数も隔てぬほどに、おはしにけむ方も知らず、あへなきわざなりや。（五卷・一九二頁）

などと描写されている。また、『都のつと』の「わざと立ち寄りて」の部分には、椎本巻の巻名の由来となった「立ち寄りらんかけと頼みし椎が本むなしき床となりけるかな」（五卷・二〇三頁）を連想させる。死者のことを、作者は「万に好ける心のありし」と回想するが、これは八の宮の人物造型とも通じるものである。作者は、死者を追悼して、

袖濡らす歎きのもとを来て訪へば過ぎにし春の梅の下風

という歌を詠んだ。「嘆きのもと」は、「木の下」を懸けている。父である八の宮をなくした姫君達のこととは、

今はまして、野山にまじりはべらむも、いかなる木の本をかは頼むべ
くはべらむ（五巻・二〇三頁）

とされているし、後年宇治を訪問した薫は、

やどり木と思ひいずは木のもとの旅寝もいかにさびしからまし（五

巻・四五〇頁）

という歌を残している。「木の下」は、宇治十帖において八の宮を指す特徴的な表現なのである。以上を要するに、『都のつと』では、宇治十帖の人間関係に現実の人間関係を限りなく接近させる工夫がなされているのである。それは、あるいは意識的な作為ではなかったのかもしれない。けれども、言葉の使用が『都のつと』における創作性ないし物語性の存在を示しているのである。

作者は、また旅に出る。「ありか定めず迷ひありきし程に、室の八島なども過ぎて、身にしみ侍りき」というわけである。これは、『伊勢物語』における「むかし、男、武蔵の国までまどひ歩きけり」（十段）などの引用である。小さな旅の積み重ねによって『都のつと』の大きな旅は成立しているのだが、小さな旅を開始させる仕組みが『伊勢物語』の東下りとのオーバー・ラップなのである。

6 みちのくに入る

6・1 浅香の沼のあやめ 『都のつと』では、有名な歌枕である浅香の沼がしばらく話題を提供する。

陸奥国浅香の沼を過ぐ。中将実方朝臣下られけるに、此国には菖蒲の無かりければ、本文に水草を葺くとあれば、いづれも同じこと也とて、かつみに葺きかへけると申し伝へ侍るに、寛治七年郁芳門院の根合に藤原孝善が歌に、「あやめ草引く手もたゆく長き根のいかで浅香の沼に生ひけん」と詠めるは、此国にも菖蒲のあるにやと、年月不審に覚えしかば、此度人に尋ねしに、「当国に菖蒲の無きにはあらず、されどもかの中將下り給ひし時、何のあやめも知らぬ賤が軒端には、いかで都の同じ菖蒲を葺くべきとて、かつみを葺かせられるより、これを葺

き伝へたる也」と語り侍りしかば、げにもさる一義も侍るにや。「風土記」などいふ文にも、その国の古老の伝など書きて侍れば、さる事もやとて記しつけ侍る也。

これは、古今集の注釈書と密接に連動している箇所である。『都のつと』の作者の問題意識は、古今集の注釈書によって発生している。古今集・巻一四・恋四・六七七・読人知らずの、

みちのくの浅香の沼の花かつみかづ見る人に恋ひやわたらむ

に関して、さまざまの説が注釈書によって提出されている。『顯昭註』には、

彼国には昔菖蒲のなかりけるとぞ承りしに、このごろは、あさかのぬまにあやめをひかするは僻事とも申しつべし。或人云、郁芳門院の根合に孝善がよめる「あやめ草ひくてもたゆくながきねのいかであさかのぬまにおひけん」（以下略）

とあるし、同様の記述は『顯註密勘』や『榮雅抄』などにも見える。ただし、『都のつと』の作者の説（浅香の沼にもともと菖蒲はあったが、実方が初めてかつみを葺かせた）という説明は他に存在しないようである。「げにもさる一義も侍るにや」という作者の感想の背後には、膨大な数にのぼる古今集注釈書の説の中に、自分が直接伝聞した説明が既に存在しているのか、まったく新しい解釈（真実）であるのか、考えこんでいるようすが如実に彷彿される。

6・2 庵室 とにかく、『都のつと』には『源氏物語』須磨・明石の影響が顕著である。ある住まいが語られる時には、ほとんど光源氏の須磨・明石における寓居が重ね合わされるのである。

山田の里といふ方へ行きぬ。さる海面に、何のいたりもなく作りたる草の庵なれど、故ある様にしなしたる庵室ありしかば、そこに留まり侍りしに、長月十日あまりの事なり、うしろの山よりおろす嵐にたぐひて、鹿の音近く聞こゆ。前ははるばると見渡さるる波の上に、更け行く月の影浮かびて、友呼ぶ千鳥のしば鳴く声も、いと心澄みてぞ聞こえ侍りし。

須磨巻の、「海面はやや入りて」(二巻・一七九頁)や、「いと見どころありてしなさせたまふ」(同頁)とか、「例のまどろまれぬ暁の空に、千鳥いとあはれに鳴く」(二〇〇頁)などの表現が連想されるだろう。なお、明石の海岸のようすは既に若紫巻で予告されていて、良清は、

近き所には、播磨の明石の浦こそはなほことにてはべれ。何のいたり深き隅はなけれど、ただ海のおもてを見わたしたるほどなん、あやしく他所にも似ず、ゆほびかなる所にはべる。(二巻・二七六頁)

と語っている。『都のつと』の表現は、若紫巻と須磨巻の表現を合成している趣きである。ちなみに、「山おろしの嵐」と「鹿の音」の組み合わせに関しては、若紫巻からの借用であろう。

(光源氏) 吹き迷ふ深山おろしに夢さめて涙もよほす滝の音かな
(中略) 鹿のたたずみ歩くもめづらしく見たまふに、なやましさも紛れはてぬ。(二巻・二九三～二九四頁)

若紫巻と須磨巻は、中世において特に好まれた巻のようである。『都のつと』でも、それは例外ではない。

6・3 走井 ここで、地名にまつわる起源譚が記される。

明くれば、遠き野辺を過ぐるとて、その野の名を問へば、「これなん走井」と言ふ。逢ふ人もなく遙かなる道に、山賊などいひて人をあやまつ類多ければ、旅人も早く行かんことをのみ急ぎ、走る故に、いひつたるとかや、聞き侍りしやらん。

『都のつと』の作者が見聞した「走井」の所在については未詳というしかないが、普通名詞としての「走井」や他の地域の固有名詞としての「走井」は、諸書に散見する。『万葉集』から見てゆこう。巻七。

この小川霧ぞ結べるたきち行く走井の上に言挙げせねども(一一一三番)

落ち激つ走井水の清くあればおきては我は行きかてぬかも(一一二七番)

次に、催馬楽の「走井」。

走井の小萱刈り収め かけ それにこそ 繭つくらせて 糸引きな

さめ

『枕草子』(「井は」)。

井は、ほりかねの井。たまの井。はしり井は、あふさかなるが、をかしき也。(以下略)

『都のつと』のもう少しあとには、「堀兼の井」が出てくる。『枕草子』によって明らかのように、「走井」は、もともと普通名詞である。水が激しく噴出して走るように流れることからの命名らしい。けれども、「逢坂の関の走井」(固有名詞)が特に有名で、王朝の歌枕ともなっている。『都のつと』の作者は、これまでも歌枕に関して大きな興味を表明してきた。だから、水が走るのではなく、人間が走るから走井という地名が発生したのだという現地の人々の見解を、ここで書き止めているのである。『万葉集』や『枕草子』が、『都のつと』の直接の源泉なのではない。けれども、作者の脳裏にはさまざまな和歌(逢坂の関の走井を含めて)が連想されていたに相違ない。

7 宮城野

7・1 阿武隈川 ここでは、表面では『伊勢物語』を引用しながら、同時に『源氏物語』をも重ね合わせるという技法が駆使されている。まず、本文を示す。

かやうに、いづくともなくあくがれまかりし程に、白川の関を過ぎて二十日余りにもなりしに、広き川のほとりに出でぬ。これなん阿武隈川也けり。都にて遠く聞きわたりし所の名なれば、限りなく遠く来にける程も思ひ知らる。渡守船さし寄せて、道行く人ども急ぎ乗りて出で侍りしに、水上遠く見渡せば重なる山の中に煙の立ち上る所ありしを、舟子どもに問ひしかば、「元弘の乱れに鎌倉の滅びしより、此の煙立ちそめて今に絶えぬなり」と語りしこそ、いと不思議なりしか。

傍線部を付した箇所は、『伊勢物語』引用であり、九段の「隅田川」のくだりを踏まえている。それは、『新大系』にも指摘されている。けれども、この中に、巧妙な形で『源氏物語』が織り込まれているのである。波線部

の「舟子ども」が、ポイントである。それに気づくと、「限りなく遠く来にける程」という表現が、別の出典をも同時に示して融合しているのではないかと推測されてくる。『源氏物語』の玉鬘巻。

京の方を思ひやらるるに、返る波もうらやましく心細きに、舟子ども荒々しき声にて、「うら悲しくも遠く来にけるかな」とうたふを聞くまに、二人さし向ひて泣きけり。(三巻・八四頁)

玉鬘巻の引用は、『都のつと』では既に前の箇所が存在していた。『都のつと』に、「渡守」と「舟子ども」とが重複する感じて登場しているのは、『伊勢物語』と『源氏物語』とが融合して引用されているからだと考えべきではなからうか。『源氏物語』自体の中に、「いとどしく過ぎゆく方の恋しきにうらやましくも返る波かな」という『伊勢物語』の歌が引用されているという複雑さがあるが、『都のつと』の作者の脳裏には『源氏物語』の表現があつたはずなのである。

なお、「元弘の乱れに鎌倉の滅びしより、此の煙立ちそめて今に絶えぬなり」の部分は、『古今集』仮名序の「富士山の煙」をかすめている可能性もある。ということは、『竹取物語』とも関連する可能性もあるということだ。

7・2 うなる松 作者は、一つの塚を見る。そのあたりを示してみる。舟より下りて行く道のほとりに、一つの塚あり。往來の人のしわざと覚えて、あたりの木に、詩歌などあまた書きつきたり。「昔東平王といひける唐人の墓也。故郷を恋ひつゝこゝにて身まかりけるが、その思ひの末にや、塚の上に草木も皆西へ傾くと申しならはせり」と語る人ありしかば、いとあはれに覚えて、彼の昭君が青塚の草の色もことわりにぞ思ひやられし。誰も旅の空にてはかなくなりなば、夜半の煙もなほ故郷の方にや靡かましと、憂き世の妄執もあぢきなくこそ覚えて侍りしか。塚の上に松の木あまた生ひならるるも、うなる松とはこれにやとあはれなり。物語の例も思ひ出でらる。

故郷はげにいかなれば夢となる後さへなほも忘れざるらん
まず、ここにはさまざまな漢詩文が直接に引用されている。『新大系』に

指摘があるように、

東平王之思旧里也、墳上之風靡西(『本朝文粹』)

三春白雪掃青冢(『唐詩三百首』)

などが、『都のつと』と関連していることが知られている。けれども、そのような直接の源泉を作者がどのような契機によつて知りえたのか、そして執筆によつてどのような文学世界を作りえたのかということをも、考えてみる必要がある。今は、王朝文学との関わりを追究している。

王昭君の故事は、『源氏物語』にも引かれている。『都のつと』には須磨・明石巻の引用が多いのだが、須磨巻に彼女の名前が見えるのである。

昔胡の国に遣はしけむ女を思しやりて、ましていかなりけん、この世にわが思ひきこゆる人などをさやうに放ちやりたむことなどを思ふも、あらむ事のやうにゆゆしうて、(源氏)「霜の後の夢」と誦じたまふ。月いと明かうさし入りて、はかなき旅の御座所は奥まで限なし。

床の上に、夜深き空も見ゆ。入り方の月影すくく見ゆるに、(源氏)「ただ是れ西に行くなり」と、独りごちたまひて、……(須磨巻・二巻・二〇〇頁)

「昔胡の国に遣はしけむ女」とは、王昭君のことである。ここで、光源氏は『和漢朗詠集』の、

胡角一声霜後夢

を口ずさむが、この漢詩は、『都のつと』の、

故郷はげにいかなれば夢となる後さへなほも忘れざるらん

と関連しているのではないか。即ち、『都のつと』の作者は、自分自身を「王昭君のことを思いやる光源氏」と重ね合わせているのである。「物語の例」は、「うなる松」のみではなくて、王昭君を引用している『源氏物語』の須磨巻をも包含しているのではあるまいか。そう言えば、『都のつと』の「塚の上に草木も皆西へ傾く」という表現も、何となく「ただ是れ西へ行くなり」と類似しているから不思議である。これは影響関係ではなく、偶然の類似にすぎない。

次に、「塚」に話題を移す。『源氏物語』の中で、読者に最も忘れがたい

印象を残す「塚」は、柏木の塚である。

右將軍が塚に草初めて青し。(柏木巻・四巻・三二九頁)

という『源氏物語』で朗詠された漢詩は、『都のつと』の「王昭君が青冢の草の色」と似てはいないだろうか。また、『都のつと』の「夜半の煙もなほ故郷の方にや靡かましと、憂世の妄執もあちきなくこそ覚えしか」という部分も、柏木をめぐる叙述を連想させないこともない。彼は、「憂世の妄執」によって死んでいったのであるし、女三の宮との間に、

いまはとて燃えむけふりもむすばほれ絶えぬ思ひのなほや残らむ
立ちそひて消えやしなましうきことを思ひみだる煙くらべに

行く方なき空のけふりとなりぬとも思ふあたりを立ちをはなれし
などという煙問答をしていたのだった。柏木という人物は、古来、二条の后と道ならぬ過ちを犯した在原業平とイメージ的に同一視されてきた。その業平は、「東下り」の旅をしている。それやこれやが、『都のつと』の作者の脳裏をよぎった可能性も否定できない。柏木のイメージをもつて、『物語の例』の第二としたい。

最後に、「うなる松」である。『新大系』は、「具体的には未詳。『うなる松』の語は源氏物語・幻にも見える」と、『源氏物語』幻巻との関連を示唆している。これが、『物語の例』の第三層である。『源氏物語』の用例とは、次のようなものである。

かの(「紫の上の」御形見の筋(「光源氏の召人である中将の君」)をぞあはれと思したる。心ばせ容貌などもめやすく、うなる松におぼえたるけはひ、ただならましよりは、らうらうじと思ほす。(四巻・五

一三頁)

解釈が難解な部分として有名である。『都のつと』の作者がどのような理解をしていたかということよりも、今は、彼が「うなる松」という言葉を、『源氏物語』と『源氏物語』注釈書を経由して知ったのではないかという推測を大切にしたい。しかし、この言葉の意味する文献は、必ずしも『源氏物語』に限定されるものではない。『源氏物語』古注釈書は、膨大な文献を博搜しているからである。まず『河海抄』をひもといてみると、最初に

漢籍がいくつか引用してある。

馬鬣松青族

という『文選』の詩句が示され、「バレウノウナイマツ、セイゾクトアヤカナリ」という文選読みが施されている。それを受けて、中国と日本に渡る漢文学から、「馬鬣松」という言葉を有するものが列挙されてくるのである。そして、

水原抄云、大國には人の墓のしるしに小松をならべうふる事ありと云々。

という『水原抄』が引用される。「墓のしるし」と「大國唐」という表現は、『都のつと』の「東平王といひける唐人の墓也」という表現と響き合うものである。『都のつと』の作者は、唐人の墓の上に生えている松を見て、『源氏物語』の注釈書に述べられている「馬鬣松」という言葉を連想したのであろう。『物語の例』とは、この場合『源氏物語』幻巻の中に出てくる言葉というくらいの意味であらうか。

ちなみに、『河海抄』には、「うなる松」に関して、

又常陸国風土記に香嶋郡内に童子女松原といふ事あり。起縁今物語の心には相叶はず。仍略之。

という注釈が含まれている。これは、『常陸国風土記』の「童子松原」の故事と、『源氏物語』幻巻の「うなる松」の使用法が違っている、という指摘である。けれども、このような注が『源氏物語』の注釈書に含まれているという事実自体が、『源氏物語』の読者に『常陸国風土記』の存在を教えていることになる。実際、『原中最秘抄』では、この童子女松原の故事が詳細に引用されている。今、『都のつと』の作者は、常陸国ではないが、東国を旅している。なおかつ、『都のつと』には、「浅香の沼の花かつみ」に関して、

「風土記」などいふ文にも、その国の古老の伝など書きて侍れば、
という文章も存在していた。『新大系』は、「ここは、特定の一書を指すと
言うよりも、国別地誌の総称として言っていると見られる」と指摘してい
る。「国別地誌」とは、『常陸国風土記』を筆頭とする『風土記』群のこと

なのだろう。『都のつと』の作者は、『源氏物語』を媒介として、漢籍の知識や、『風土記』の伝説を知っていた。そのような知識が、現実の見聞と重ね合わされているのである。

7・3 宮城野 作者は、宮城野にさしかかる。

それをなほ過ぎて、武隈の松の陰に旅寝して木の間の月に心を尽くし名取川の渡りを過ぐるとは、行く水の帰らぬことをあはれむ。宮城野の木の下露も、まことに笠も取りあへぬ程なり。花の色々、錦を敷けると見ゆ。中にも本荒の里といふ所に、色なども他には異なる萩のありしを、一枝折りて、

宮城野の萩の名に立つ本荒の里はいつより荒れ始めけむ

と思ひ続け侍りし。この所は昔は人住みけるを、今はさながら野ら藪となりて、草堂一字より外は見えず。

「宮城野」と「本荒」、そして「萩」と言ったら、『源氏物語』桐壺巻の歌が連想されることだろう。

宮城野の露吹きむすぶ風の音に小萩がもとを思ひこそやれ（一卷・一〇五頁）

あらし風ふせぎしかげの枯れしより小萩がうへぞしづこころなき（一卷・一一〇頁）

『都のつと』が桐壺巻を直接に引用しているわけではないが、読者の想念においては、桐壺巻の物語世界が揺曳している、ということだ。「木の下露」は歌ことばであるが、『源氏物語』にも使用例がある。惟光が光源氏に報告する場面。

雨そそきも、なほ秋の時雨めきてうちそそげば、「御かささぶらふ。げに木の下露は、雨にまさりて」と聞こゆ。（蓬生巻・二巻・三三二八頁）

『都のつと』も『源氏物語』も、どちらも『古今集』東歌の、みさぶらひみ笠と申せ宮城野の木の下露は雨にまされり

を引歌しているのだが、表現の類似にとどまらない関係もあるのではないか。というのは、『都のつと』の「野ら藪になりて」という箇所だが、これは『源氏物語』蓬生巻の、

この宮をば不用のものに踏み過ぎて来ざりければ、かくいみじき野ら藪なれども、さすがに寝殿の内ばかりはありし御しつらひ変らず。（二巻・三二〇頁）

と一致しているのである。つまり、宮城野で荒廃した中に草堂一字が残っている状況と、荒廃した野ら藪の中に未摘花の邸宅がかすかに残っている状況とが、意図的に重ね合わされているのである。『都のつと』のこの部分は、桐壺巻と蓬生巻とを合成するかたちで成立しているのである。

ちなみに、「花の色々、錦を敷けると見ゆ」の部分に関しては、『源氏物語』若紫巻の、

名も知らぬ木草の花どもも、いろいろに散りまじり、錦を敷けると見ゆるに、……（一卷・二九四頁）

あたりを踏まえているのだろう。

7・4 本荒の萩 『都のつと』では、引き続いて「本荒の萩」という歌ことばの詮索が記される。

そもそも本荒の萩とは、春焼が残したる去年の古枝に咲きたるをいふなりと、聞きおき侍り。それを木萩とも申すなり。これは枝ざしなども、なべての萩よりも強々しく、あばらなるにや。本荒の桜なども詠みて侍ればと思ひ給へしに、今聞き侍れば、もしこの里の名によりてもや詠みけむと、初めて思ひ合はせられ侍り。

「木萩」という言葉に関連して、『新大系』は、「他に見ぬ語で、作者（又は作者に語った者）独自の解か」と記す。ただし、『古今集』巻一四・恋四・六九四・詠人知らずの、

宮城野の本荒の小萩露を重み風を待つこと君をこそ侍て。

に関して、『頭註密勘』は、

もとあらのこはぎとは、萩のふるえを春やきて今年の若ばへのおひかはれるより花はさく。もとあらとは古き枝より花のさくをば木萩とてこはごはしき也。それを本あらのはぎと云。（中略）本あらのはぎくらと云事あり。

と注釈している。ここに「木萩」という言葉は見え、表現も『都のつと』

と酷似している。また、『柴抄』にも、

もとあらの木萩は、古枝より春わかばへ出て、秋はなさを木萩と云もとあらの木萩、もとあらの萩といふも、他木より本のあらき也。

などである。『都のつと』の作者は、歌学書についての知識を有していることは自明だから、このあたりを直接意識しているのだろう。自分がかつて読んだことのある諸説を思い浮かべ、なおかつ現地ですべて知り得た（推測しえた）新発見を付け加えたのである。

8 塩釜・松島

8・1 塩釜のありさま 旅はつづいて、いよいよ塩釜に作者はさしかかる。

蟹の家ども多く作り並べたるに煙の立ち上るも、これや塩焼くならんと見ゆ。浦漕ぐ船の綱手も、所からにや心引く筋也。更け行く月に唐櫓の音絶え絶え聞こえて、いと心すごし。「わが御門六十余国の中に、塩釜といふ所に似たるなし」と、古の人の言ひけんも、ことわりなりと、

有明の月と共にや塩釜のうらこぐ舟も遠ざかるらむ

ここには、実にさまざまな古典文学がひしめきあって引用されている。

まず、「わが御門六十余国の中に」云々という部分は、『伊勢物語』八一段をほぼそのまま引用している。久しぶりの『伊勢物語』引用である。ただし、『伊勢物語』引用は『源氏物語』引用と重複しているというのが、『都のつと』の方法なのであった。「これや塩焼くならん」の部分が『源氏物語』引用であり、

煙のいと近く時々立ち来るを、これや海人の塩焼くならむと思しわたるは、おはします背後の山に、柴といふものふすぶるなりけり。（須磨

巻・二巻・一九九頁）

を踏まえているのである。また、「唐櫓」という言葉も、もう少しあとで説明するが、いささか『源氏物語』に関連のある表現である。

けれども、『源氏物語』のみで『都のつと』の表現が発生したのではな

い。ここには、『古今集』とその注釈書の諸説が、大きく関わっているのである。まず、「浦漕ぐ船の綱手」の部分。ここは、『古今集』巻二〇・東歌・一〇八八の、

みちのくはいづくはあれど塩釜の浦漕ぐ船の綱手かなしも

の引歌である。ところが、この事実のみを指摘するのでは十分ではない。問題は、そのあとの、

浦漕ぐ船の綱手も、所からにや心引く筋也。

という『都のつと』の表現の言葉つづきである。ここには、『新大系』も注しているように、「引く」と「綱手」の縁語関係が存在する。しかし、それだけだろうか。この古今集歌についての注釈書を、次に示してみることになる。

ツナデカナシトハヒク人ナシト云也。ヒカルベキモノ、ヒカル、事モナケレバト也。（『教長注』）

「綱手かなしも」の「かなしも」に関して説がさまざまあるわけで、「引く」という行為をめぐって注釈が展開されているのである。『顕昭注』や『顕註密勘』でも、この説は登場する。また、『伊勢物語』の古注釈書も、八一段の注の中で「教長卿云」「清輔朝臣の云」などとして、このやりとりを記録しているものがある（『冷泉家流伊勢物語抄』）。

『都のつと』の作者が実際に見ているのは、海人が「綱手」を「引いている」さまである。「引く人なし」という注釈書の説もあるのだが、本当は「引く人」がいたのだと思い、それによって自分の心までが「引かれる」ような感興にとらわれたのである。「引く」という縁語を、作者が連想した背後には、『古今集』注釈書の説があったのではないだろうか。

ちなみに、「綱手」という言葉は、『源氏物語』須磨巻でも、

まして五節の君は、綱手ひき過ぐるも口惜しきに、琴の声風につきて遙かに聞こゆるに、所のさま、人の御ほど、物の音の心細さとり集め、心あるかぎりみな泣きにけり。（二巻・一九五頁）

という文脈の中で使用されている。「所のさま」は、『都のつと』の「所かにや」と対応するものであろう。

次に、『唐櫓』について考えてみる。この語は、『古今集』巻四・秋上・

二二二の、唐櫓、唐櫓、唐櫓

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

藤原菅根朝臣

秋風に声をほにあげてくる舟はあまのと渡る雁にぞありける

という和歌と密接に関わっている言葉である。『白氏文集』の「晴虹橋影去、秋雁櫓声来」という漢詩を踏まえており、種々説明されている。『古今集』の注釈書では、この歌に関して「雁櫓」という詩語の存在が指摘されている。

又雁の鳴く声は舟の櫓ををすに似たれば、詩に雁櫓とつくれり。歌にも船にもよする也。（『頭註密勘』）

『都のつと』の「唐櫓」は、あるいは「雁櫓」の当て字ではなかったろうか。ちなみに、この歌は、『源氏物語』須磨巻でも引歌されている。

ほのかに、ただ小さき鳥の浮かべると見やるも、心細げなるに、雁の連ねて鳴く声楫の音にまがへるを、うちながめたまひて、涙のこぼるるをかき払へる御手つき黒き御数珠に映えたまへる、古里の女恋しき人々、心みな慰みにけり。（二巻・一九三頁）

『源氏物語』では、雁の声が楫の音に類似していると表現されている。それに対して、『都のつと』では楫（櫓）の音が雁の声に似ているとされているのではあるまいか。「唐櫓」という表記は、底に「雁櫓」という古今集注釈書に由来する詩語を秘めており、『源氏物語』須磨巻とも関連しているのである。

8・2 心ある蟹 今度は、『後撰集』の引歌である。

それより浦伝ひに、松嶋に尋ね行く。げに心ある蟹の住みかと思えた

り。
「浦伝ひ」という言葉が『源氏物語』を踏まえていることは明らかだろう。明石巻は、「浦伝ひ」と称されることもあったとされるし、光源氏が須磨から明石まで浦伝ひに移動することが語られているからである。次の「心ある蟹」云々という表現だが、これは後撰集・巻一五・雑一・一〇九三・素性法師の、

音に聞く松が浦島今日ぞ見るむべも心ある海人は住みけり

を踏まえている。ところが、この歌が『都のつと』の作者に意識された直接の契機は、やはり『源氏物語』にあるのではなからうか。この歌は、『源氏物語』で五回にわたって引歌されているが、『都のつと』に大きな影響を与えたと推測される須磨巻にも引歌として使用されている。

（光源氏）松島のおまの苦屋もいかなむ須磨の浦人しほたるころ
（藤壺）しほたることをやくにて松島に年ふるあまも嘆きをぞつむ

（二巻・一八〇～一八三頁）

藤壺が「松島の心ある海人」に喩えられているわけだが、その比喩は賢木巻にさかのぼる。光源氏は藤壺の奥ゆかしさに感動を受けて、歌を口ずさむ。

「むべも心ある」と忍びやかにうち誦じたまへる、またなうなまめかし。

ながめかるあまのすみかと思ふからにまづしほたる松が浦島
『都のつと』では、男女の愛ということとは全くかすめられていない。ちょうど旅立ちに関して、在原業平や光源氏が踏まえられながらも、「愛の過失」については無視されていたのと同じようなものである。だから、『都のつと』の「心ある蟹」という表現には、女性の影は感じられない。にも関わらず、この言葉が作者の想念をつき動かして具体的な表現を執筆させるためには、『源氏物語』が関与していたのではないかと思われる。

8・3 州崎 この箇所は明確な『源氏物語』享受ではないが、文脈というか語法が『源氏物語』と類似しているという例である。

州崎に松生ひ傾きて、木末を浪に浸せり。行き交ふ舟は、さながら下枝の緑を越え行く。それより少し距たり、小嶋あり。これなん雄島なるべし。

『源氏物語』浮舟巻で、薫と浮舟が宇治川を眺める場面には、山の方は霞隔てて、寒き州崎に立てる鶴の姿も、所がらはいとをかしう見ゆるに、……（六巻・一三六頁）
とあり、その直後に浮舟と勾宮がその宇治川を渡る場面で、

有明の月澄みのぼりて、水の面も曇りなきに、「これなむ橘の小島」と申して、御舟しばしとどめたるを見たまへば、大きやかなる岩のさまして、されたる常磐木の影しげり。(六卷・一四二頁)

とある。「橘の小島」が「州崎」なのかどうか今一つ明瞭ではないが、文章の流れ具合が『都のつと』と何とも似ているのである。『都のつと』の作者が無意識のうちに『源氏物語』浮舟巻をかすめたとしても、不思議ではないだろう。

9 武蔵野を経て帰京

9・1 宇津の山 作者は武蔵野に戻ってくる。そのあたりの描写。

その他、昔知れりし人二人ありしかば、折から嬉しく覚えてやがて伴ひつつ、堀兼の井、ここかしこ見巡り侍りしかば、このたびの思出なる心地ぞし侍りし。素性法師が宇津の山にて在中将に行きあひけるも、かくやと思ひやられ侍りき。

もちろん『伊勢物語』九段の「修行者あひたり」の一節を踏まえているのだが、修行者の名前を「素性法師」としているのが特殊である。『伊勢物語』の古注釈書では、登場人物に対して具体的固有名詞を与える作業が熱心に行われているが、普通には「僧正遍昭」が当てられ、ごくまれに「蓮寂法師」が当てられる。『新大系』が述べるように、「素性とする所伝は他に見ない」のである。

『都のつと』の作者は、『伊勢物語』を古注釈書のように読んでいた。ただし、具体的人物名が普通と違っていたのである。考え方は二つあり、当時の『伊勢物語』注釈書のある物に修行者を素性法師とする説が実際にあったとするか、作者の錯誤とするかである。後者の可能性もかなり存在し、素性が遍正の子供であり混用しやすいこと、松島のくんだり素性法師の「心ある蟹」を引用した時の記憶が無意識の中に残っていたこと、などの理由が考えられよう。

9・2 空貝 作者は、巡り会った知人に旅の思い出話を聞かせる。

昔も、長柄の橋の鮑屑、井手の蛙の日干をだにこそ持ち侍れ、忘れ形

見にもし侍らむと思ひしかば、松の落葉など掻き集めて侍りし中に、松笠といふ物のありしと、また塩釜の浦に空貝などやうの物を拾ひ集めて侍りしを、この人に取り出だして見せ侍りしかば、かく申されし。

(中略)

さらに朽ちせぬ契りの程も思ひ知られて、いとど旅の衣手もしほたれまさり侍りしに、……

文脈上は隔たつてしまっているが、「橋」と「契」と云えば、『源氏物語』浮舟巻の「州崎」の箇所直後に、

宇治橋の長きちぎりは朽ちせじをあやぶむかたに心さわぐな (六卷・

一三七頁)

という薫の歌がある。何となく、『都のつと』と関係があるようにも思える。実は、「空貝」の要素も浮舟の物語には存在し、失踪した彼女のことを薫は、

「骸をだに尋ねず、あさましくてもやみぬるかな、いかなるさまにていづれの底のうつけにまじりにけむ」(六卷・二二七頁)

などと思ひやっている。表現の雰囲気、『都のつと』と『源氏物語』浮舟巻とに共通するものがあるということだ。それが作者の意図的な作為であったかどうかは、不明としか言えない。

もつとも、「塩釜の空貝」に関しては、『伊勢物語』注釈書を直接の源泉として挙げるべきだろう。塩釜が『伊勢物語』八一段に登場することは前述したが、そこには「空貝」の言葉は存在しない。しかし、『和歌知頭集』(島原文庫本)には、源融の河原院が塩釜のようすを模したことを語り、みぎわのうみにくだけたるうつけがいなどちりみだれたるやう、まことにしほがまのうらにたがはざりけり。

と注している。このあたりの記憶が、作者をして「塩釜の空貝」を拾わせただけではないかと推測されるのである。『伊勢物語』の注釈書の知識が、『都のつと』の表現を支えている。なお、『古今集』巻一六・哀傷・八五二・紀貫之の、

河原の左のおほいまうちぎみの身まかりてののち、かの家にまか

りてありけるに、しほがまといふ所のさまをつくれりけるを見て
よめる

君まさで煙たえにししほがまの浦さびしくも見え渡るかな

に関して、『顕註密勘』は、

これは、河原左大臣の六条河原にいみじき家作りて、池をほり水をたたへて、うしほ毎月に三十石まで入れて、海底の魚貝等をすましめたり。(以下略)

と注している。あるいは、『古今集』の注釈書の知識も連動していたことであろう。『都のつと』のこの部分は、『古今集』や『伊勢物語』(そのものというよりは注釈書)についての観念的知識を確認する目的で、『空貝』が拾われたのだと読まねばなるまい。そして、そのことを作者が表現しようとする、『源氏物語』浮舟巻のような「物語性」をひとりでに帯びてしまうのだった。

9・3 都のつと いよいよ『都のつと』の旅も終了し、最後の一文が書き記されることになった。これが、『都のつと』という書名の由来ともなっている。

かくのみあくがれ行く程に、日数も積もりて、さすが故郷の方もおぼつかなくて、いづくを家路と定むるとしはなけれども、立ち帰るべき道は急がれ侍りし程に、一夜の旅の宿にて、老いの眠りを醒まして、壁に向かへる残りの灯を挑げそへて、道すがらの名高き所々の心に残りしを、忘れぬさきにとて、思ひ出づるままに、前後の次第を言はずこれを記しつけて、都のつとにとて持ち上りぬ。

まず、明石巻の表現との類似から指摘したい。光源氏は、須磨での大暴風雨に直面して、都のことを思い出す。

雲間もなく明け暮るる日数にそへて、京の方もいとおぼつかなく……(二巻・二二三頁)

これが帰京に結び付くわけではないが、構文が似ているのである。そう考えると、『都のつと』という言葉も『源氏物語』に由来すると考えるべきではないかと思われる。もちろん、『都のつと』は陸奥への旅を記した

書物であり、随所に『伊勢物語』が引用されていたので、常識的には中田論文が指摘しているように、『伊勢物語』一四段の、

栗原のあねはの松の人ならばみやこのつとにいざといはましを

を典拠とすべきだと思われることだろう。当然、この『伊勢物語』一四段も踏まえられてはいる。しかしながら、『都のつと』の本質は複雑な古典享受にあつたのであり、『源氏物語』享受と『伊勢物語』享受とが絡み合つて一つの文章を形成していったのだった。だから、この最後の部分でも『源氏物語』の影響が忘れられてはならないのである。

『源氏物語』での「都のつと」という言葉は、光源氏の須磨・明石流離と関連して用いられている。都の人が地方にいる光源氏に持ってきた「都のつと」もあれば、光源氏が都の人々のために持つて上京した「都のつと」もある。

さるべき都のつとなど、よしあるさまにてあり。(須磨巻・二巻・二〇

七頁)

これは、都から頭中将が須磨の光源氏を慰めようとしてもつてきた品物のことである。

まことの都のつとにしつべき御贈物ども、ゆゑづきて、思ひ寄らぬ限なし。(明石巻・二巻・二五七頁)

これは、光源氏が明石から都にもつてゆくべき品物であり、『都のつと』における「都のつと」の使用方法和一致している。

『都のつと』という書名が『源氏物語』に由来しているのではないかと考える時、作者・宗久は自らの旅日記を光源氏が須磨・明石での三年間の日々を書き綴つた「絵日記」になぞらえているのではないか、という推定が可能になってくる。『源氏物語』では光源氏の絵日記が「都のつと」と表現されることはない。しかしながら、この「絵日記」こそが光源氏の手になる最大の「都のつと」だったことは、絵合巻などで証明されている。宗久の『都のつと』に絵が含まれていたかどうかはわからない。けれども、「言葉による歌枕描写」をめざした本書は、都人にはあたかも一巻の絵合巻のように受け止められたのではないか。それを期待して、作者は『都のつと』

を執筆したと考えられるのである。

10 おわりに

『都のつと』は、多分に物語的・歌学書的・注釈書的な要素を含む紀行文であった。『源氏物語』や『伊勢物語』の表現を数多く引用し、『古今集』やその注釈書の歌ことばに関心を示し、『都のつと』の具体的な表現が紡ぎ出されていた。『伊勢物語』の場合は「東下り章段」に影響関係がほぼ限定されるのに対して、『源氏物語』の場合は須磨・明石の両巻の影響は圧倒的であるものの、宇治十帖などの影響もかなり広い範囲で指摘できた。

『都のつと』の作者は、自分自身の旅の体験を書き記そうとしたのだろうが、それを単独で表現したのではない。王朝文学の表現や、それに対する中世の解釈を絶えず意識し、それとの連関において自分の旅を文学史的に位置づけようと試みたのである。結果的に、相当地に「創作味」の富んだ紀行文となっている。書かれてある内容が虚構であるという意味ではなくて、虚構の王朝文学の表現をちりばめた結果として、物語的雰囲気濃厚に漂わせているという意味である。

『新大系』の『中世日記紀行集』に収載されている他の紀行文学を見ても、この『都のつと』ほど物語性に富む作品は稀である。そして、それは現代の私達が松尾芭蕉の『奥の細道』に対して抱いているイメージとも近いものがある。

『都のつと』の和歌の数は、それほど多くはない。しかし、読者は、それを決して不満に思うことはないだろう。散文の部分にそれを補うほど多分に和歌的情緒が漂っているのである。そして、そのしみじみとした韻文的情緒を醸し出しているのが、『源氏物語』を筆頭とする王朝文学だったのである。『都のつと』という作品は、読書知識としての王朝と作者の生きる中世とが、渾然一体となって成立しているものであった。と同時に、それは観念としての歌枕と現実としての地名との立体化なのでもあった。『都のつと』の表現の文芸性には、これまで与えられていたよりもっと大きな評価が妥当なのではあるまいか。

私が今回指摘漏らした『源氏物語』享受もたくさんあることだろうし、見当違いの箇所を『源氏物語』享受の具体例だと認定した例もあることだろう。けれども、後者の場合でも、『都のつと』には少なくとも『源氏物語』の雰囲気だけは引用していると思うのである。『都のつと』の作者が直接に意識していた古今集注釈書の特定作業も、もつとつきつめて考察すべきだったと思う。また、『源氏物語』でも『伊勢物語』でもない独自の『都のつと』本来の表現の分析は、今回は行えなかった。王朝文学の色彩に織り上げられる以前の『都のつと』の基本色についての考察は、後日を期したいと考える。

(一九九一・一・二八)

平成3年2月7日受理
人文社会科学系列 文学研究室

From “*Genji-Monogatari*” to “*Miyako-no-Tsuto*”

Keiji SHIMAUCHI

Abstract

“*Miyako-no-Tsuto*” (都のつと) is a book of travels written in Muromachi-Period (室町時代). Many scenes of this work are influenced by those of “*Genji-Monogatari*” (源氏物語). This paper aims to point out those influences concretely.

有の論理としての對の思想と一見と異なり